

日本工学会創立100周年記念事業報告

昭和 54 年 11 月

社団法人 日 本 工 学 会

かねてより準備が進められていた工学系 60 学協会が加盟している (社) 日本工学会の創立 100 周年記念式典が、昭和 54 年 11 月 20 日、皇太子殿下・同妃殿下のご臨席のもとに東京丸の内日本工業倶楽部大会堂において盛大に行われた。

式典は内閣総理大臣代理として長田裕二科学技術庁長官、文部政務次官、日本学士院院長 (代理・第二部長)、日本学術会議会長等学会に関係の深い 200 余名が参列、川越達雄実行委員会総務小委員長 (土木学会専務理事) 司会のもとに 11 時 15 分田畑新太郎実行委員 (日本鉄鋼協会専務理事) により開会が宣言され吉識雅夫会長の式辞に続き、皇太子殿下自ら推稿を重ねられたという次のごとき「お言葉」を賜わり参列者に深い感銘を与えた。

皇太子殿下のお言葉

日本工学会創立 100 周年記念式典
昭和54年11月20日 (火) 日本工業倶楽部

工学会が創立されて以来ここに百年、その記念すべき式典に臨み、皆さんとともに日本の工学の発展とそれに尽くした人々の足跡を偲びつつ未来に思いをいたすことはまことに意義深いことと思います。

工学会は、工部省工学校と工部大学校において六年間寝食をともにした第一回卒業生によつて組織されましたが、その後間もなく広く工学工業に従事する人々に門戸が開放されました。それ以前には工学技術は学問としての基礎がなく、家伝と徒弟教育により閉ざされた社会の中で伝えられていたことを考えますと、学会という開かれた場で工学が研究され論じられるようになったことは

まことに画期的なことといえます。

工部省工学校の設立は、「仮令当時為スノ工業無クモ人ヲ作レバ其人工業ヲ見出スヘシ」と首唱力説した後の工学会会長山尾庸三の努力に負うところが大きかったといわれております。当時の日本では、「未タ我国ニ於テ為スヘキ工業ナシ学校ヲ立テ人ヲ作ルモ何ノ用ヲカ為サン」という反対が強かつたということを思うとき、この百年の日本の工業の目覚ましい発展に今更ながら驚くとともにこの発展の源を作った人々の識見に対して深く敬意を表するものであります。そしてこの工学教育のおかげで、それまで外国人の手に頼っていた日本の工業は、日本人の手による工業としての歩みを始めたのであります。

さきの戦争は日本の工業に対し大きな破壊をもたらしましたが、そのすみやかな回復とその後の著しい発展は、それまでに日本で達成されていた工学や技術を持つ人材が養成されていたことによると思います。ここに山尾庸三の「人ヲ作レバ」の言葉が思い起されるのであります。

今後日本が進んでいく道には多くの困難があると思います。そしてその困難を乗り越えてゆくためには工学の力にまつところまことに大きなものがあります。しかし一方、工学の力が大きければ大きいほど工学に携わる人々の人間的な広い視野からの高い誠見が求められてきます。工学に携わる人々がこうした識見を養い、日本国民の幸福と世界の平和に資するよう未来に向かって進まれることを期待し、式典に寄せる言葉といたします。



写真一 「日本工学会創立 100 周年記念式典」でお言葉を述べられる皇太子殿下



写真二 「目で見える工学 100 年展」をご覧になられる皇太子殿下

このあと来賓祝辞、今泉常正実行委員長（日本鉱業会会長）による記念事業報告、外国を含めた多数の祝電が披露され 11 時 58 分に式典を終了した。

引き続き三階大食堂において尾佐竹徇理事（筑波大学教授）司会のもとに祝賀パーティーが開かれた。世界工学団体連盟の副会長である Dr. R. B. Finch ご夫妻（アメリカ合衆国機械学会専務理事）はじめ各国大使館の科学担当アタッシェも多数出席、山尾庸三氏の孫にあたる山尾信一氏も加わり、両殿下を囲んでなごやかな懇談が続いた。祝賀会終了後 13 時 30 分から二階大会堂で記念講演会が開催され、樋口清之国学院大学名誉教授の「日本人の生活の知恵にみる工学」および評論家・柳田邦男氏による「工学と安全性」と題する講演が行われた。

この他の記念事業として、工学会会員である 41 学協会の専門分野ごとの将来展望を収録した『記念論文集』（工学 100 年年表つき）、および工学会の機関誌であつた『工学叢誌・工学会誌（明治 14 年 11 月～大正 10 年 10 月）総索引』誌の刊行、記念絵葉書の作成が行われたほか、日常生活の中での工学の占める役割を広く理解してもらうため 11 月 20 日から 12 月 2 日まで「目で見る工学 100 年展」が北の丸の科学技術館の 4～5 階で開催され人気を集めた。21 日には 9 時～9 時 55 分まで皇太子殿下が来場され吉識会長、今泉実行委員長、須田展示小委員長（日本鉱業会事務局長）等の説明で、電池、電気自動車、乗物、時計、地震、化学、磁石、エネルギー、電信、コンピュータなど 9 テーマにわたる展示物および各学協会の特別展示品を質問をまじえながら熱心にご覧になった。なお、朝日新聞 11 月 24 日付「論壇」欄に登載された三島良績広報小委員長（東大教授）執筆による“百周年迎えた日本工学会——功罪を工学者自ら考える好機——”も、工学 100 年の歩みにふさわしい PR となつた。

以下に日本工学会の 100 年の歩みの概要と問題点を述べる。

（社）日本工学会は、明治 12 年（1879 年）11 月 18 日に東大工学部の前身といえる旧工部大学校の第 1 回卒業生 23 名（土木、電気、機械、造家、化学、鉱山、冶金の 7 学部）の同窓会として発足、明治 3 年の工部省設立（鉱山、製鉄、灯台、鉄道、電信等の官営事業を所管）に多大な貢献をした当時の工部卿山尾庸三が初代会

長に就任、大正 6 年 6 月に古市公威（初代土木学会会長）へ理事長を引き継ぐまで 35 年の長きにわたり「工学会」の発展につくした。工学の父ともいべき山尾会長の業績については伝記等もなく今回を機会に記録類を整理し直す必要がある。この間、わが国工学の発展とともに次々と各学会が独立、日本鉱業会（明治 18 年）、造家学会（後の日本建築学会・明治 19 年）、電気学会（明治 20 年）、造船学会（明治 30 年）、機械学会（明治 30 年）、工業化学会（後の日本化学会・明治 31 年）、土木学会（大正 3 年）と分化し、個人会員が激減、大正 11 年に学協会の連合体として再発足した。この間、田辺朔郎博士を委員長とし、昭和 6 年 12 月に『明治工業史』（10 巻）や『日本工業大観』を刊行、昭和 4 年 10 月には世界 43 か国から 671 名の参加者を得て秩父宮殿下を名誉総裁、総数 4500 名、提出論文 813 編に及ぶ万国工業会議 WEC を東京で開催しているが、これには古市公威理事長の功績によるところが大きい。また、万国工業会議開催の予行として実施された昭和 2 年の工学会大会は、学協会連合体としての工学会のあり方を示唆するところ多く、爾後 4 年ごとに大会を開催することとなり、昭和 7 年、同 11 年、同 15 年（参加者 6000 名）、同 19 年と戦時中にもかかわらず 5 回開催された。その間、工学工業年報 3 回発行など、工学の総合発展、工業技術開発促進に貢献している。なお、この間昭和 5 年 3 月には会名を「日本工学会」と改め今日に至っている。

戦後においては、世界の技術革新の影響もあり、工学の分野はますます専門細分化し、工学会が連合体として発足当初 12 学協会であつたものが、現在は 5 倍 60 の学協会（会員総数 45 万名）に達している。細分化と同時に巨大化も行われ、一方、境界領域に属する学際分野の学協会も増加しており、事務研究会等を設け勉強会を随時開催している。今回の 100 周年事業を機会として日本工学会の今後のあり方等、十分な議論をつくす必要がある。

展示会を含む今回の記念行事の経費は、加盟学協会の臨時会費、関連業界から寄せられた賛助金、日本船舶振興会の補助金などで賄われた。付記して厚くお礼を申上げる。